

# でらしね

2004(平成16)年12月23日鑑賞(ホクテンザ1)



監督＝中原俊／企画＝綾部昌徳／エグゼクティブプロデューサー＝竹村和晃／出演＝奥田瑛二／黒沢あすか／益岡徹／三谷昇／田鍋謙一郎（メディアボックス配給／2002年日本映画／94分）

……俳優兼画家である奥田瑛二がホームレスの画家として登場！ 見事な才能をスクリーン上で魅せていく。この才能を認め、最後の気力を奮いおこさせる女性が黒沢あすか。自らヌードモデルとなって、山奥の巨木に絡む姿の魅力は絶品！ フランス語で「根なし草」を意味する『でらしね』というタイトルもピッタリ。実にいい映画です！



## 「でらしね」とは

『青春の門』をはじめとする数多くのヒット作を生み出した私の大好きな作家、五木寛之氏の昔の作品に『デラシネの旗』という作品があった。これは、私が大学へ入学した翌年である1968年5月にパリでおこった「5月革命」を舞台とし、その中で活動する日本人青年を主人公に描いたもので、私たちの学生運動の時代すなわち1970年安保の時代に、学生たちの人気の的になっていたもの。「でらしね」とはフランス語で「根なし草」のこと。あの時代の学生たちも、たしかに「でらしね」だったが、この映画の主演である、ホームレス画家、水木譲司（奥田瑛二）は、まさに「でらしね」そのもの。いかにもピッタリのタイトルに感心！



## 俳優兼画家としての奥田瑛二の才能にビックリ！

水木を演じるのは奥田瑛二だが、パンフレットによれば、「本作の中では実際に撮影とリンクしながら、劇中画を仕上げていくという初めての体験に挑戦し、

スティックで緊張感溢れるアーティストの姿を好演している」とあるから、映画の中で描かれていた数々の作品はすべて奥田瑛二自身の作品らしい？ そう言われて、この映画に登場する彼の作品を鑑賞しているとそりゃ見事なもの！ ダンボールやベニヤ板に描いた小品もそれなりに面白い物があるが、映画の後半、「君の裸が描きたい」と言い始めてからは、俳優兼画家の奥田瑛二であるだけに、その鬼気迫る演技（実技？）の迫力はすごいもの。監督業としても成功している奥田瑛二を見ると、やはり、天が二物も三物も与えているヤツがこの世には存在しているのだとあらためて痛感。もっとも、こんな才能をうまく生かしたいいい映画ができたのは、企画、脚本や監督のおかげ。奥田瑛二はその人たちに大いに感謝しなければ……。

### 画廊・画商と画家

「21世紀は女性の時代」といわれるが、その言葉がピッタリあてはまる魅力的な女性、橘今日子を演ずるのが黒沢あすか。今日子は画廊のオーナー、岡本光太郎（益岡徹）の愛人でありながらそれに安住することなく、作品に対する自分の目（鑑識眼）を信じて画家、水木に賭け、岡本と決別して独立する決心を。「1人の画家を育てるのには何千万円もかかるんだ」という岡本の言葉には説得力があり、独立して画廊を経営しようとする今日子の考え方は私の目にも無謀と思えるが、それができるのが女性の強さ！ 立派なものだ。

しかし、そんなビジネスライクな今日子に対し、描き手である画家の水木はわがまま放題で、全然今日子の意向に共鳴することはなかった。そのため大作を描くことも、契約書にサインすることも拒否。さあ、今日子はピンチだが……。

### 黒沢あすかの魅力に脱帽

発作に襲われて病院に担ぎこまれた水木を助けたのは、人のいいホームレス仲間のアカちゃん（三谷昇）とキイちゃん（田鍋謙一郎）の2人。アオちゃんと呼ばれていた水木の絵をいつも1枚500円で買っていた今日子は、ホームレスながらも水木と共同事業（？）を営んでいたアカちゃんとキイちゃんにとってはいいお得意さんだし、ただ1人のまともな社会に生きている友人。家を飛び出

してホームレスになっているくらいだから、健康保険証も持っていない水木がともに病院で治療を受けるためには入院保証金が必要となり、現実的な対応が迫られる。それができなければ「のたれ死」となるのがホームレスの宿命というもの……。

こんな窮状にあった自分を助けてくれた今日子のために水木はやっと大作を描こうと決心し、今日子とともに山奥の山荘に入ったが、巨大な自然に圧倒されて自分の描こうとするテーマは容易に水木にも見えてこなかった。そんな水木がやっと発見したテーマは、昔の「ある事件」の後はずっと封印していた「女の裸」。そして水木が選んだそのモデルは目の前にいる今日子だった。「君の裸が描きたい」と迫る水木に対して今日子は……？ 山奥で実際にその製作に格闘する姿やその完成した絵の魅力はスクリーン上でゆっくりと……。『六月の蛇』（02年）で怪しげな魅力をたっぷりと見せてくれた黒沢あすかが今回もオールヌードで「熱演」だが、絵のモデルだけでは少しもったいない……？

### かなり魅力的な映画だが……？

私も小学生時代は、いろいろな絵のコンクールで入賞したし、中学時代は油絵を描くのが大好きだった。また、大学時代は急に思いついて、「ある油絵」を描いたこともある。今でも愛着のあるいくつかの作品はロッカーの奥にしまってあるから、興味のある人は是非見てもらいたいもの。また、弁護士の仕事も30年もしていると、画商にも知り合いができるし、絵の売買や画廊の経営をめぐるトラブルの事件を処理したこともある。そんな私にしてみれば、この映画での水木の生き方も面白いが、水木譲司＝奥田瑛二が描いた作品そのものにも興味がある。

とりわけ、ヌード姿で巨木に絡む黒沢あすかを描いた作品は興味深い。「受精樹1、2」と名付けられたその作品は、対象を忠実に写生したものではなく、奥田流(?)にかなり抽象化したものだが、私の目には非常に魅力的！ 人間の生きざまと絵に対する興味の両方をもってこの映画を観れば、かなり魅力的な作品だが、例によってマイナーな映画館で上映しているこの映画の観客はほんのわずか……。ちょっともったいないような気もするが……。

2004(平成16)年12月24日記